

## 解説

鎌田東一（京都大学名誉教授・宗教哲学者）

本書の監修を引き受けている間の2022年12月にステージⅣの大腸がん（上行結腸癌）が発覚した。患部周辺を5センチほど切除する手術をし1ヶ月入院。その後、一年半余におよぶ抗がん剤治療を続けた。頭髮は抜け落ち、脳頭頂部に3センチほどの転移が見つかった。その周りを10センチほどの浮腫が取り巻いていた。かなり深刻な状況だった。

ではあっても、本書を読んでいたからか、あるいは監修者として、著者であるしんめいPさんとやり取りをしていたからか、まったく心的ダメージはなかった。むしろ、がんであることを僥倖ととらえて「ガン遊詩人」を名乗り、ギター一本を抱えて各地に巡遊し、詩を朗読し、自作の歌をうたい続けた。がんはあっても『自分とか、ないから』の功德・効能は大したものだ。

もちろん、『自分とか、ないから』を読んでも「がんとか、ないから」というわけにはいかない。がんはガンとしてしっかりとわが身にある。また末端神経障害や味覚の変調や身体バランスの低減などフィジカル（身体的）ダメージもかなりある。

しかし本書で著者が、じつにわかりやすく、自分の言葉で自分を「いじり」、自分の「黒歴史」も包み隠さず笑い飛ばしながら、自分のこだわりや弱点を解除・解放していく方途と東洋哲学的根拠を示してくれているので、たいへん参考になり、生きて死んで逝く道行きの励みにも指針にもなる。その上、超おもしろすぎ。

各章のテーマは、タイトルだけみると、「無我」(第1章)、「空」(第2章)、「道」(第3章)、「禅」(第4章)、「他力」(第5章)、「密教」(第6章)と、何やらむつかしそう。もろ仏教や老荘思想だし、本格東洋哲学の主要概念だ。しかしそれが、このユーモアとウィットに富んだ著者にかかると、とてもエンターテインメントな思想アクロバットをスペクタクルに見せられ(魅せられ)るようで、目が紙面に吸いついて離れられなくなる。

多くの大学教授や批評家などの仏教や東洋哲学についての本は、専門的で理詰めものがほとんどだ。専門的な間違いは少ないかもしれないが、しかし、生きていく際の力や指南になることはほとんどない。

本書の魅力と特色は、読者の生き方やあり方を、自分を切り刻みながら問いかける「捨身戦法」だ。

だいたい、ほぼすべての専門書は言葉も論理も防衛的で、分厚い防衛線を張りに張って、

張り巡らせている。万里の長城みたいに。博士論文の審査会を英語では「デイフェンス Defense」というが、質疑の突っ込みを徹底防衛して撥ね返すことにしのぎをけずり、命を削る。過酷な知の闘争である。

しかし、本書は、「ツッコミとボケ」、あるいは、「ボケとツッコミ」を一人二役で演じ切る。突っ込み方も半端じゃないが、ボケ方もハンパじゃない。ある種の「泣き笑い」戦術である。泣きと笑いが交互に来て、救われながら昂揚しまくれる。

特に、100ページ近くある第2章、著者の「居酒屋のブツダ」ぶりは泣き笑い、一人芸として凄味がある。「デイフェンス」をかなぐり捨てて「投身（身投げ、我<sup>われ</sup>投げ）」している。「われ」を晒しに曝して、突き放し、いじり、笑いを取る。読者はそれによって、救われつつも昂揚し、元気になる。このあたりが、この本が10万部を超える大ヒットになった理由だろう。わたしが特におもしろくおもったのは、この第2章と第4章だ。飛んで、抜けて、破る。

ともあれ、現段階で10万部の大ヒット。超凄すぎ、だ。「監修者」のわたしは、著者から連絡があるたびに、ただひと言、「好きに書いたら〜」「思うまま書いてよ」と言い続けただけだが、著者はそれを真に受け止めてか、ほんとうに自由に、しかし、しつかりセル

フケアも読者のケアもできるタッチに仕上げた。その思想の取りまとめ方と表現の仕方は独自の唯一無二のユニークさとオリジナリティがある。

だからこそこの本を、わたしのようながんや、持病などの不安を持っている方々にも読んでもらいたいとおもう。「自分」を作っている（と思ひ込んでいる）「殻（空）」が剥がれ落ちてすつきりと「自分らしく」（「自分とか、ないから。」なのに？）生きられるだろう。矛盾しているようだが、「東洋哲学」とはそのような思想道である。

わたしも「ガン遊詩人」としてこれからもいつそう「遊戯三昧」を生きて死んで逝きたい。ぜひ生きていく旅路においても、死に逝く旅路においても、本書を親しい道連れにしてください！